

江巢さんがあらわれて、この欄になにか書きたまえ、といわれたときは、これは皮肉なことになったと思つた。さる協会からその會誌の中で、面白かつた記事と、やめた方がいいと思ふものについて意見がききたいといつてきたのはほんのひと月ほど前であつた。不學の私に面白い記事などあろう筈もないから、やめた方がいいとおもふことの欄に、「科學者のぞつとするような隨筆」と書いて投稿してから、ぞつとするような、という表現が氣にいつて一時間ばかり楽しかつた。このいきさつを江巢さんに申述べてみたが、『ぞつとしないように熱い話でもかけばいい』と一向にとりあつてくれない。こういう工合にするすると名文句のでる人が書けばいいのと思つたがそこは持前の弱氣で腹の中では何を書いたらいいのかな、などと考えはじめていたのである。

いまではその片鱗も認め難いが、これでも稚い頃には、子供に目のない兩視にはかない希望を與えるに足るいくつかの天分(?)があつた。年の割に將棋が強いとか、本碁を知つてるとか、竹の棒一本で板塀をのりこせるとかおおよそ子供らしくない天分のうちでこれならと自他ともに許していたのは火鉢の炭をつぐことであつた。この子は火をおこすのがうまいからいまにお金持になるよ、とよくいわれたものだが、さういうことはないことが今にして明かになつたわけである。

大豆ぐらゐの火種を10分間くらいで十能にいつばいの火にするぐらゐはお茶の子であつた。こういう小さい火種になると、迂濶に火箸でつまんだりしたら火箸に觸れた所から熱が逃げ出して忽ち眞黒になつてしまふ。すこし黒くなつた程度ならフーフー吹けばまた赤くなることもあるが、黒みが80%にも及べば今度

は吹きかける息に冷却されて一層消えるのが早くなり、最後の一點がはかない光輝を示したと思ふ次の瞬間にフツと消えて、にわかにならなくなつた。薄く覆われて萬事終りである。

こういふのを扱ふときは灰の中にかすかに見える火種はひとまず横目で確認しておいて、まず炭の薄片をいくつか集めて櫛をくむのがこつである。この炭片の大きさは火種の大きさと呪み合せて選ぶ必要がある。炭が堅炭で、火種が大豆ぐらゐなら1糎角で厚みが數糎のものでないといけない。炭が大き過ぎると熱傳導が良くて火種が冷やされてしまふ。佐倉炭ならどんなに大きくても大丈夫で、切口を水平にして火種をのせるだけでいい。こうした準備ができたところで火種をのせて全身火鉢の

なく櫛の頂上と覺しきあたりには青い焔がともつて一段落となる。

それから先は快よいぬくもりを楽しみながら櫛の上面側面に適宜に灰をかけてやるだけでいい。灰のかかつたところだけが眞赤に熾ることは表面からの熱傳達をへらした當然の結果とはいへ、不思議なくらいである。以上の秘術を繰り返すうちに私の技はますます冴えてきて火種をきつと見据える目付にも名人の傍を宿すようになった。堅炭は熱傳導がよくて使い難いが灰の中に二、三回ころがしてインシュレーションを與えれば軟かい炭と同様によく熾ることも知つた。また、ただの櫛ではまわりじうから風が入る結果空氣の流れ方が不整で効果が少いので風穴は一方だけにして、よけいな隙間は灰をかけてふさいでしまふとなおいいこともわかつてきた。

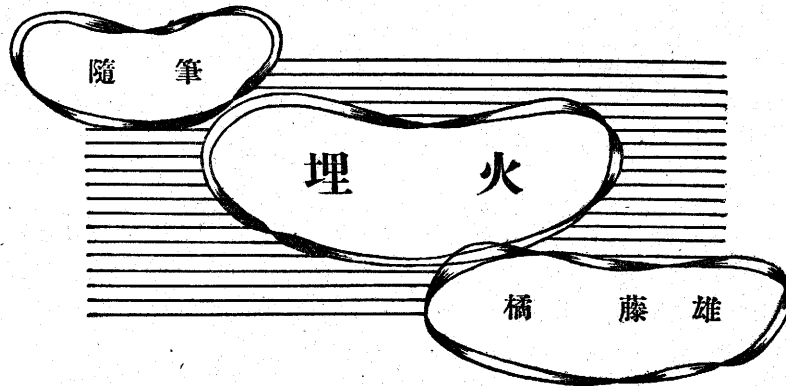
かくして私の完成した櫛は、或は蒙古の包(パオ)にも似、また洋風の圓屋根にも似て工藝品の域に達したのである。人と話をしているとき火をい

じる癖は身をいれて閉いていないようでは不作法なものだが、私は工藝品を楽しむために往々にして禮讓の士たる誇りをすてる。口の悪い友人がこれを見て『君のはまるで炭を焼いているようだ』といつたが成程いわれてみれば炭焼籠とそつくりであつた。このごろは炭も少しし特技を活用する折も稀になつて可惜天才も霞んでゐる。たまたま機會があつてもうちの女房はわが工藝品に甚だ冷淡で、美しい圓屋根の天井に裁縫の鑊を突込んだりするからかなわぬ。この間から切れているアイロンを今度の休みに修理して難を逃れたいものと思つている。

(1949.11.19)

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆



中に逆立ちするぐらゐの勢いで吹き立てるのである。頭から灰だらけになるがそんなことを氣にしているようでは専門家にはなれない。やがて櫛に火が移り赤くなつたやつが個數にして3~4個、面積で10平方糎にも達すればまずまず命を取りとめたというものである。

しかしここで氣を許してはいけませんので、個人經營の商店が、ある程度身上をふやすと會社組織に切りかえて忽ちにして多額納税者におさまるのにも似て、この時期に櫛の規模を大きく組み直す必要がある。一度突きくずすや、見るみる黒味を帯びてゆく虎の子の火を素早く積みかえるときは、一刻を争う病人の手術をするような工合で緊張とスリルの一瞬である。やがてメリメリと割れ目が入る音がしだせば完成近し。まも